

空の産業革命

昨年暮れ、十勝の上士幌町に滞在していた折に、役場の方から道の駅でクリスマスドローンショーがあるからと誘われて見学した。ドローン300機が音楽に合わせて隊列を組み、夜空でLED電飾が輝きながら華麗に飛行する姿は圧巻であった。会場には多くの観客が訪れて歓声を挙げていた。新型コロナウイルスで暗い話題が多い中で、希望が持てるイベントを開催しようと地元で活動する民間企業を中心に企画したものである。

現在さまざまな分野でドローンの活用が進んでいる。当初は、単なる空撮の道具だと思っていたが、空中写真測量や橋梁、送電線等の高所インフラの点検、農薬散布や農作物の作況調査、自然災害時の調査、行方不明者の捜索など活用の領域を大きく拡大させてきている。

6年前に安部元総理が、「未来投資に向けた官民対話」で「早ければ3年以内にドローンを使った荷物配送を可能とすることを目指す。」と発言した。かなり高い目標だと感じたが、「空の産業革命」に向けた強い決意であった。その後、制度の具体的なあり方を協議する官民協議会が立ち上がり、また、ドローン操作に使用できる周波数帯の拡大や出力アップなど、新たな電波利用の制度の検討などが急速に進められてきた。

ドローンによる荷物配送の実証実験も各地で始まってきている。上士幌町でも、昨秋に、食料品を農家に配送する実証実験を始めた。個人の家でドローンを着陸させて荷物を届けるのは全国でも初めての試みだという。人口が減少し、高齢化していく地方部では、買い物に出かけることも、商品を届けることも難しくなる。無人による配送が実現すれば、その効果は大きい。一方で、事業化に向けては、安全性の確保や航続距離・時間、積載量の向上などの技術開発面に加えて、さらに電波利用等の環境整備などさまざまな実証試験が求められる。そこでは、より規制の少ない広域の空間が必要であり、十勝のような広大な地方部は圧倒的に有利である。一方で、実験だけに終わることなく、実験の成果を政策実践の先進地につなげていく継続的な地域戦略が大事だ。

30年程前になるが、北海道開発庁の提唱で北海道をスカイスポーツのメッカにしようという取り組みが始められた。十勝でも熱気球、グライダー、パラグライダーなど様々なスカイスポーツの活動が展開されてきたが、そのねらいは北海道の恵まれた自然と広大で自由な空域を活用しようというものであった。

また、その当時閣議決定された第5期の北海道総合開発計画で、十勝地域の特性を活かした産業展開戦略として、「十勝の広大な空間を活用した航空宇宙産業基地」の可能性が明記された。それが現在の大樹町の宇宙開発に向けた実験につながっている。

新型コロナウイルスによって多くの人々は過密であることのリスクを痛感した。広大な
疎の空間の可能性と魅力を活かし、先人の思いをつなぎながら、あらためて十勝の地から
「空の産業革命」を仕掛けていく好機ではないだろうか。

(十勝毎日新聞 「耕土興論」 2022年1月16日)